2024年1～2月掲載分

習志野　大慈弥 爽子

点睛の一語を恋うてゐる霜夜
純白の闇へ消え入る雪女郎
義理と嘘絡めてバレンタインデー
堰落つる水が光となる二月
吹き曝す屋敷祠や一の午

八王子　石井　蓉子

年用意ガイドヘルパー良く動く
焼き芋の声に癒され励まされ
冬至粥小さき座卓に置きにけり
一人居にプレゼント来る聖夜かな
一年の感謝の響き除夜の鐘

新宿区　壺守　けいこ

悴める手に肺いっぱい息かける
見ゆるかと富士を探して去年今年
竹爆に後ずさりするどんどかな
旅支度も三寒四温に迷ひつつ
一枝の蠟梅もらう香とともに

町田　小森　まさひこ

初富士にまん丸月の落ちにけり
谷戸奥に古りし家あり福寿草
雪富士を真正面に高速道
雪降れと富士を走りし雪女郎
避寒地の小鳥良く飛び良く食べる

2024年3～4月掲載分

習志野　大慈弥 爽子

地虫出づふっくら土を持ち上げて
ころころとぬらぬらぬらと地虫出づ
次の橋まで下萌の土手づたひ
人影に蝌蚪の大国乱れけり
散り際の重さを揺らす紫木蓮

八王子　石井　蓉子

一言を飲み込むバレンタインの日
悴む手そっと出したる贈りもの
春の道一歩いっぽに五七五
若き日の母に似ている雛かな
草萌の色くっきりと雨あがる

新宿区　壺守　けいこ

啓蟄や並びし影の長々と
み吉野の花の移ろひ見る三日
雨音に今年の花を惜しみけり
遠山を間地かに見せて山桜
補助車の媼に纏はる春日かな

町田　小森　まさひこ

黒土をついて物の芽出にけり
裸婦像の肌を流れる春の雨
猫柳の揺れる綿毛が触れてくる
人知れず咲きし春蘭見てをりぬ
鎌倉の春の一日の夕べかな

2024年5～6月掲載分

習志野　大慈弥 爽子
でんと腰据ゑ芝の間の草をひく
建てつけの悪さを憂ひゐるついり
きらきらと目と歯が笑ひゐる日焼
伝へ聞く流人の心花蘇鉄
おしゃべりに頷くだけでゐて涼し

八王子　石井　蓉子
踏まれても雨にも濡れてもいぬふぐり
山頂に雲泳がせて山笑ふ
上向いて生きているよと花に言ふ
かりそめの相合傘や花の雨
母の日やゆっくりと聞くありがとう

新宿区　壺守　けいこ
五十年変はらぬ正門桜咲く
万緑や一日二便路線バス
若き日の宿訪ぬれば水芭蕉
虚子散歩道や蓼科五月晴
五月空映し姨捨棚田かな

町田　小森　まさひこ
母の日や異国から来るカーネーション
牧薄暑牛は四つの胃を持ちし
離島へと向かう客船鯉のぼり
走り馬逞しき四肢でそりを引く
紅の花最上の風を受けて揺れ

2024年7～8月掲載分

習志野　大慈弥 爽子
父の日や我が名を父の形見とし
日焼子に前後の区別なかりけり
偲ぶ日の小鉢に偲ぶ新豆腐
しだれては闇を溶かしてゆく花火
蜘蛛の囲の緻密巧妙なる魔力

八王子　石井　蓉子
パンサラダにアイスティー添え朝餉とす
サングラス通しまぶしき君の顔
木下闇の風の通りに佇みぬ
子燕の風に向かって飛び立てり
浜木綿の岬で恋の生まれけり

新宿区　壺守　けいこ
残る鴨田水汚して草を食む
満月の日の姨捨の五月闇
大夏木肩を組みたる道祖神
万緑や命の木霊漏れてきし
万緑やホテルは県を跨ぎ立つ

町田　小森　まさひこ
虚子庵の障子に強し夏日かな
虚子庵の木枠の窓の実梅かな
虚子庵の文机一つの夏座敷
大夏木虚子の歩きし道に立つ
指呼浅間遠く蓼科雲の峰

2024年9～10月掲載分　　2024年11～12月掲載分

八王子　石井　蓉子

アイスティー飲み干し部屋を出でにけり
落蝉を手に乗せ撫でてそっと置く
一杯の水尊しや原爆忌
はじけ落つ線香花火や季節行く
コスモスに手招きされて来し季節

新宿区　壷守　けいこ

水引の花垂る流れ切れてをり
虫乱れ跳びて生まれし稲穂波
萩の花庭整へて花の寺
ジェイアール最高地点の草紅葉
二百二段登る社秋祭り

町田　小森　まさひこ

夢二忌や夕霧湖をうずめゆく
弧描く大地果てまで初紅葉
編み笠に顔を隠して秋祭り
旧町を巡る胡弓や秋祭り
馬肥ゆる尻屋は風の強きとこ